

盆飾り

「土曜寸言」202・08・10

「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花

萩の花尾花葛花撫子の花

女郎花また藤袴朝顔の花」

(万葉集巻八、山上憶良)

そろそろ月遅れの盃蘭盆が始まる。盆といえば、筆者には秋の七草との関係で色鮮やかな少年時代の記憶がある。盆の数日前になると里山に入って、秋の七草を採集するのである。七草がちゃんと採集できるかどうかは、男児としての能力評価にも関わっていたから、少年たちにとってこれは単に遊びではなかった。それゆえ普段から、どこに桔梗が咲き、どここの林に撫子が群生しているかを他人には内緒でマークしておいたものである。

盆飾りには、秋の七草以外に、秋に収穫予定の農産物も供えられた。生姜、人参、サツマイモ、里芋、落花生。これらを畑に行って取ってきて供えるのも男の子の仕事だったから、盆前は子供といえども結構忙しかったのである。

ところで、これらの農産物は、みな土中で成長する。こういう作物の葉っぱや茎など外に露出している部分だけを見せて、大学生たちにその名前を当てさせてみた。結果は惨たんたるもので、正解は皆無。あるうことか、農家出身の学生にして同様である。彼らが家業を手伝わないために折角の学習機会を失っている証拠である。

いま、教育界では理科嫌いが増えて、その対策に四苦八苦し

ている。理科に限らないが、学習の動機付けは、日常の何気ない体験の論理化にある。特に理科で言えば、自然との関わりの中でふと生ずる疑問が学習の動機付けとなる。その意味で、農家の子弟にとって、農作物という自然は理科への、市場と農産物価格のメカニズムは社会科への、何れも格好の動機付けになるはずだ。しかし、どうもそうなっていないらしい。この国では教育や学習は、教室で黒板と教科書に向かってやるものだ、実に固定的に考えているようだ。勉学の場などは、身の回りのいたる所にあるというのに、である。

さて、今や里山は荒れて、猿や熊、猪の跋扈する世界となった。だから、筆者が少年時代に採取した秋の七草がそこに咲いているのかどうか。

峡南地方に住んでいる友人は、山地の畑の耕作を諦めたという。理由は、何を栽培しても収穫の頃になると猪やカラスに横取りされてしまうからだというのである。みずみずしい落花生を甘辛く茹でてビールのつまみにと勇んで収穫しに行ってみると哀れ掘り返されて見る影もない。

どうやら、猪はどの葉っぱが落花生でどれが人参なのかちゃんと分かっている。理科の学習動機付けは猪の方がしっかりしているらしいのだ。

